



崎元雄厚 2010.1.13

- 1 はじめに
- 2 日本文化の概説
- 3 南方系文化
- 4 照葉樹林文化
- 5 歌垣・夜這い
- 6 郷中教育
- 7 ポーイスカウトと郷中教育
- 8 薩摩人の性質、長所及び欠点
- 9 生麦事件と薩英戦争で見せた薩摩人の気概
- 10 薩摩人の心意気
- 11 薩摩と中央政府
- 12 パリ万博
- 13 ペリー以前にやってきたフランスの黒船
- 14 明治維新と薩摩
- 15 調所笑左衛門と浜崎太平次の活躍
- 16 薩摩人の評価
- 17 なぜ薩摩は西南戦争後急速に衰退したか
- 18 日の丸と島津斉彬
- 19 麦飯男爵：高木兼寛
- 20 議を言ひな
- 21 酒とおなごでござわす
- 22 ソイ・ソース

- 23 シリウスの下に先隼人族遺跡？
- 24 玉竜への期待

## 1 序文

玉竜を卒業と同時に薩摩を離れて半世紀が過ぎたが、薩摩人であることを誇りに思っている。誠実、明るい、てげつけ、嘘をつかない、足を知る、性善説の信奉者などの薩摩人気質が、源日本人と日本文化の良いところを今に伝えているように思える。

昨今の社会情勢を見ると、やたらに利己的な生き方に走り、かつて日本民族が大切にしていた公の精神と日本の良さはどこに行ったのであろうか。以前誰もが持っていた日本人の誇りと心棒はどこに消えてしまったのか。

我々が享受している豊かで平和な生活は、先人達の血の滲むような努力と、伝統的に教え込まれた徳育教育によるところが大きい。明治維新における薩摩の下級士族の活躍等、近代国家建設で見せた志士たちの尽力なくしては今日の日本の繁栄はありえない。我々が物質的にも精神的にも恵まれた日々を送ることができることに深く感謝しつつ、先人達の築いてくれた遺産を後輩達に繋いでいかねばならない。

一 国平和主義という蛸壺生活で一人ぬくぬくと我が世を楽しんでいる日本。近隣諸国の恫喝に振り回され、馬鹿にされているのも分らない日本。明治時代の日本は貧しかったが、独立自尊・自助努力の精神に燃え、独り立ちできて外国からも尊敬されていたのに。

日本固有の文化に誇りを持ち、かつての日本人がもっていた気概、自立心、自信を取り戻そう。

我々を育ててくれた薩摩の文化、風習、歴史を振り返っての項目に分け薩摩に関する話題をまとめた。以下はそのうちの一部分である。

## 2 日本文化の概説

日本文化には英国同様さまざまな外来文化が積層している。異なった文化が縦系、横系となり日本文化を織り成しているとも言える。日本の文化の基層は縄文文化で代表される南方的要素とそれに近い照葉樹林文化的要素、さらに弥生文化で代表される氏族制・家父長制・血統を重んじる北方的要素が重層し、地域によって様々な濃淡がある。それらは地域的に大別すると、中部地方ないしは関東地方を以って東西に分かれる。方言、味、もちの形、

イロリとカマド、など生活に関する基本的要素も見事東西に分かれている。黒潮の洗う九州、四国、紀伊半島には、若衆組、歌垣（ウタガキ、カガイ）という南方文化が色濃く残っている。

### 3 南方系文化

薩摩は南方系の血筋と文化・風俗を色濃く受け継いでいる。インドネシア・マレーシア、メラネシア等に住んでいた人達、特にインドネシア・マレーシア系が高度の航海術をもって波状的に北上したり、あるいは漁民が海流に流され、フィリピン、台湾、琉球、九州に漂着し、縄文文化の源流たる南方系、照葉樹林系文化をもたらしたものであろう。日本のことをヤポネシアと称した島尾敏雄の指摘は的を射ている。古代大和朝廷に仕えた隼人属の楯や刺青の風習、遺伝子の類似性、思考・行動様式や人々の性格、対人関係などからしても、薩摩人にはこれらの地域の文化の特徴が濃く流れていることは否定できない。

### 4 照葉樹林文化

照葉樹林帯は、カシ、ナラ、クス、ツバキなど表面に光沢のある葉を持つ常緑樹より構成され、ネパール・ブータン・ヒルマ・雲南省などの中国南部・朝鮮南部・西部日本とほぼ東西に帯状に分布する。この帯には共通した生活文化があり、元鹿児島大の中尾佐助教授はそれに照葉樹林文化と名付けている。食べ物では、イモ類、モチ種（モチ、チマキ、オコシ）、納豆・味噌、豆腐、ナシズシ、こんにゃくなどがある。また、ウルシ、羽衣伝説、花咲爺、サルカニ合戦などの説話、死者の魂は山に帰っていくという山上世界の観念、正月にモチとサトイモを供える風習、歌垣、焼畑農業なども共通している。これらの特徴の多くは東南アジアの生活・風習、すなわち南方系文化と共通するものが多い。

### 5 歌垣・夜這い

歌垣は『風土記』『万葉集』にも記されている古くからある習慣で、日本では若者衆と夜這いと言われるものに相当する。それは満月の夜若い男女が山や丘に登り、歌や踊りを楽しみ、結婚相手を見付ける行事である。『広辞苑』によれば、「日本でも上代男女が山や市などに集まって互いに歌を詠み交わし舞踏して遊んだ行事で、かつ一種の求婚方式でもあり、性的解放が行われた」とある。チョンガの若い男達は共同生活、あるいは傭泊りは別として

ても共同活動をするケースが多い。

この若者衆の風習が昭和30年代前半まで残っていた熊野の例では、夜中家に鍵を掛けることは厳禁で、若者が夜這いの帰りに空腹を感じたらこの家の台所に入り込んで飯を食べても自由で、若者のため米櫃には一食分食へ残すことが村の不文律であったそうである。熊野ではチョンガの若者衆は専用の建物（若衆宿）で、それが無い地域は持ち回りで若者達が集まって学習や研修に励んだ。

司馬遼太郎によれば、「若衆宿には決して卑猥な雰囲気はなく、夜這いも古格なものであり、やみくもなものでもなく、好きな娘のもとに通うわけで、真面目なものかどうかは若衆頭その他がよく監督している。もっとも、人気のある娘の場合、複数の若衆が通うことになるという点には若衆宿は寛容だったらしい。娘が妊娠した場合、父親が誰だということになると、娘に父親の任命権があり、娘は複数の若者の中から自分の好みにあう若者を指名した。この場合、若者には拒否権はない。生まれてきた子が自分の子でない可能性が百もあるのだが、太古以来默契があり、父親が誰であってもその子供は村の共同体の子であるとした。これは母系性の思想のせいであろう。」夜這いの民俗学的研究を行った赤松啓介に寄れば、戦前中国地方の田舎では若者衆に限らずあらゆる年齢の男女が性的解放を楽しんだそうである。

この若者衆、夜這いの風習は明治時代まで日本各地の農漁村に広く残っていた。民俗学者の宮本常一の聞き取りでは、西日本では約半分の娘が夜這いを経験していたという結果が出ている。西表島では現在でもこの風習は残っているという。一般的に夜這いは青年男子が娘のところに押しかけることであるが、愛媛県南部、広島県北部、丹波地方などでは女の夜這いの風習があったと伝えられており、「丹波よいとこ女の夜這い・・・」と言う唄が残っているそうである。

西南戦争で薩摩軍が鹿児島へ撤退するに当たり、官軍の構える可愛岳を突破することになった。薩摩軍は真夜中道なき道を、断崖を越え木根や岩をつかみ前進した。大西郷は琉球列島に島流しされていた時、キンタマを風土病の象皮病にやられ肥大し、歩行が困難であった。それで西郷は籠で移動していたが、難所では籠から降りてこそこえ這って行かねばならなかった。「がっつい、おババ（夜這い）んこっじゃなあー」\*と言ったので、周りの兵士達がどっと笑い、張り詰めていた緊張感がほぐれたこの逸話が残っている。

\* 「おババっついで夜這いをしているおババだわなー」

## 6 郷中教育

薩摩版の若者衆としては、藩をあげて士族の教育に取り組んだ郷中教育がある。郷中教育は400年の歴史があり、城下士、郷士を問わず地域に分けて、のり才から23・24才までの青少年が年齢別に自治、修養組織を編成し、互いに切磋琢磨した薩摩独特の教育制度で、「負けるな、嘘をいわず、弱い者をいじめぬな」の薩摩の掟を徹底的に訓えた。「負けるな」というのは、「口には負けない勇氣を持って」と言っていることである。郷中には高い自治権と権威が賦与され、身分に関係なく選出されたリーダーたる郷中頭が、公的に人にあう時には、家老といえども紋付袴姿で郷中頭を迎えなければならない場合、家老と郷中頭は対等の立場にあり、発言権も同じであった。

郷中教育は、地区毎に固まりがちで、団体行動に際しては効率よく機能したが、個人の判断力、獨創性、積極性を削ぎ没個性的人材を生むという傾向がないとはいえなかった。しかし、リーダーの資質を有する若者に対しては、周囲が協力してその長所を伸ばすように配慮した。さらに、その様な優秀な者には造士館や開成所で高度の教育が行われ、郷中教育の欠点を補った。これら3機関は相互補完的であった。

造士館は、小学校から大学まで一貫した教育体系を持ち、実学を重視したエリート養成機関であり、日本の技術大國化の礎になった。開成所は英語学を中心に、物理、化学、数学、兵学等を教えた。幕府に内密に英国に留学させた薩摩藩英国留学生10名の大部分は開成所の学生であった。

薩摩藩の下級士族を中心として創設された「私学校」は、銃隊砲隊と、士官養成を目的とした幼年学校より構成され、これは郷中教育の延長線と言つより郷中そのものであるといわれている。

学問は中学校レベルの教育でよしとされ、学問より心の爽やかさ・潔さ、勇敢さ、弱者へのいたわりの三徳目の涵養を第一とした。臆病、卑怯を最も卑しんだ。理屈っぽく、議論好きで、論理的能力に優れ、商売上手な長州、高度の教育、規範、モラルに重点を置いた芸津、異常といえるほど高等教育を重視した肥前などの諸藩と比較して、薩摩の重視した教育と徳目は、単純明快であった。

若者衆、郷中教育は、若者達に発言する機会を与え、青年教育と男女交流に大きな成果をもたらした。しかし、西南戦争では郷中教育の悪い面が出た。

## 7 ポーイスカウトと郷中教育

乃木大将が明治天皇の名代で英国王ジョージ五世の戴冠式で英国を訪問した際、ポーイスカウトの訓練を見学した。創設者ハウエル卿に「このようにしてこの制度を創設されたのか」と聞いたところ、「お国の薩摩の郷中制度を研究し、良い点を取り入れ組織化した」といわれ、乃木大将が驚いたという話が残っている。薩英戦争による英国の薩摩に対する評価の変化であろう。東郷平八郎や大山巖等日露戦争の指導者の多くが郷中教育で育っていることから、その教育に関心を持ち研究した成果であると思われる。

中国・朝鮮、ドイツなどの観念主義が行動の基礎になっているとは違い、薩摩は英国と同様に現実主義といわれている。英国のエリート教育機関であるパブリック・スクールは、学問は程ほどにして、スポーツを通して特に不屈の精神、リーダーの誇り、ノブレス・オブ・リジエ精神（上に立つものには大きな義務が伴う）、教養、徳育と常識等の涵養を重視したが、これらには郷中教育の教育方針と相通じ合うものが多く、両者は類似した価値観を共有し、互いに親近感がなくもない。しかし、惜しむべきは、薩摩には英国の「したたかさ」と「あくどさ」が見事な程欠けていることである。

## 8 薩摩人の性質、長所及び短所

薩摩人の特徴は、南方的そのものである。ポリネシア的人の良さ、深く考えない、人を疑わない、リーダーに無条件に従う、性善説の信奉者、足るを知る、穏やか、てげ、照れ屋（ゲンネ）、勇敢、弱者へのいたわり、独立自尊の精神に欠ける、などである。さらに、歴史学者がよく指摘する「領土欲が少ない」ということも薩摩の特徴かも知れない。また、伸びる可能性のある若者に対し、周囲が協力してその長所をのばすように心掛け、チャンスを与え、指導したというのも薩摩のやり方であった。これと同じ教育が英国でも行われていた。

一方、リーダーたちは、情報収集に最大の努力を払い、いつも冷静に現状を直視して分析し、現実的処置を講じてきた。さらに、目先の戦術思考でなく、将来と全体を見通した戦略眼をもって物事に対処してきた。薩摩には暗君なしといわれる優れた政治的判断力があつたので、歴史的に見て極めて稀と言われる薩摩藩を800年も継続できたのである。この南方的性質と、情報を非常に大切にし、冷静に現実に対処する能力は薩摩の特徴を表すコイン

の画面である。

薩摩人の美質は沢山あるが、2、3、の例をあげると、維新後政府高官になった者が人材を登用するに当たって藩、門閥、出自、縁故関係にとらわれず、能力、人物本位でかなり公平な人選をしたことである。これは、長州が身びいきの傾向が強く、長州出身者で閥を形成しがちであったとは対照的であった。降参した敵、捕虜や弱者に対する寛大な扱いも薩摩の特徴である。他藩あるいは新政府軍は降参した敵や入院中の敵を割りこ簡単に殺すことがしばしば起こったが、薩摩が関係した戦争、例えば西南戦争や戊辰戦争でも、降参した敵や入院中の敵には大寛大で殺害することは殆どなかったといわれている。さらに、薩摩(西郷、大久保、小松が代表)は、長州(井上が代表)と対照的に金銭感覚が清潔で無私精神に富んでいた。

薩摩人に対する悪口として、その行動は長州や肥後と反対に薩摩の大提灯と称され、リーダーの意向にひたすら従い、独立して判断し行動することが不得手、主体性がないと言われてきた。例外の者もいなくはないが、個人の判断で行動するタイプが少ないことも事実である。

薩摩には、全国に通じるような思想家が少ない。これは、国東半島の三浦梅園等ごく一部の人物を除いて九州一円についても言えることである。これは気候風土のせいであろう。

## 9 生麦事件と薩英戦争で見た薩摩人の気概

本事件は、1862年2月に久光公が孝明天皇の勅命を携えた大原重徳を江戸まで護衛し帰途についた際神奈川の生麦村で発生した事件である。幕府は予め薩摩に帰路外国人と問題を起こさぬように、外交団には薩摩の行列が通過するので出歩かないように通達を出していた。

約400名よりなる久光公の行列が生麦村を通過中、護衛の制止にも拘わらず騎馬4人組の英国人が行列に接触したので、奈良原喜左衛門が一人を切り、海江田信義が止めを刺した。残りの3人は刀傷を負いながらも逃げ失せた。この少し前、米人が行列に遭い下馬脱帽して事なきを得ている。薩摩は、幕府に下手人の足軽は逃亡したと届出た。幕府から事件解決まで滞留を要請されたが無視した。なおこの海江田信義は、桜田門外で井伊直弼の首を切り落とした有村次左衛門の実兄である。

英国は幕府に対して英人殺害を放任し、犯人逮捕に何もしなかったとして、10万ポンド

(現在は約106億円)の賠償金を要求した。この金額は最新鋭の蒸気船4隻に相当する法外なものであった。

英国はもし受け入れなければ、かつ不満足な回答であれば、軍事行動をとると通告して、手始めに江戸湾を封鎖する作戦を計画し遂行中であつた。横浜には何時でも出港できるように多数の軍艦を待機させて約1800万円相当の水食糧をはじめとする軍事行動用の物資を調達中で、横浜港はその積み込みのため陸では大八車が、海では小船が行き交い混乱を極めていた。1863年5月に老中格の小笠原長行がその支払いに応じたため、この軍事行動は危機一髪で回避された。

英国は薩摩に「下手人を引渡し、英国官吏の面前で処刑すること(当初は下手人を引渡しの代わりに島津久光の首級を差し出せと要求してきた)および遺族への賠償金29万ポンド(603万両、約27億円、1両=4.5万円として)の支払い」を要求した。この金額は薩摩藩年間予算の45%に達する膨大なものであつた。それを拒否し続けたので、1863年8月11日ニール代理公使がクーパー提督指揮下の2400トンの旗艦を含む2隻の艦隊を率いて薩摩にやってきて谷山沖に投錨した。艦隊を派遣して恫喝すれば、幕府や中国のように簡単に屈服すると考えてのことであつた。藩では寺田屋事件関係者21名の謹慎も解かれ、総動員体制に入った。

海江田信義、即ち無礼を働いた英国商人に止めをさした男が堂々と藩の代表者として交渉し、「下手人は逃亡しここにはおいてもはん。薩摩藩は生麦事件に一切責任はあいてもはん」として相手の要求を拒否した。鹿児島城内で交渉しようとして上陸を促したが、成功しなかつた。藩では代理公使と提督の一行を城内で皆殺しにする計画だったのだ。

同事件の下手人である奈良原喜左衛門の発案で本人がリーダーになり、スイカ売りに変装した若者より成る斬り込み隊が、スイカ、野菜、鶏の下に脇差を隠し、2隻の小船に分乗して敵艦に接近した。大砲の合図と共に一斉に斬り込み、奈良原と海江田はニールと提督を刺し殺し、他の藩士は水兵を無視して士官のみを襲うことになっていたのだ。この決死隊は海江田信義、黒田清隆、大山巖、野津鎮雄、榊山資紀、西郷従道、伊東祐亭、仁礼景範等元気者の藩士17人より構成されていた。大部分は英軍側に警戒され乗艦を拒まれたが、大山や黒田等ごく一部は英国軍の阻止にも拘わらず強引に乗艦した。艦上では誰がどの相手を手切るか相談していた。酒を飲んでいて黒田は、太鼓腹の英国水兵の腹を小突いてからかっていた。そこに、久光の撤退の命令を伝達する使者がやってきた。殆どの者が乗船できなかつた。

たから作戦は中止になったのである。「チエスト」の奇声と共に、彼等はスイカを切りまくって撤退したそつである。この作戦は失敗したが、敵艦への切り込みとは、いかにも天を衝かんばかりに気力溢れた当時の薩摩隼人達の勇氣凜々たる姿を髣髴させる話ではないか。

英国艦隊は、外国から購入した蒸気船3隻(約8万ポンド、約6億円)を失うと戦意を喪失すると考えて拿捕し曳航した。薩摩はこれを開戦と判断し、暴風雨の吹きすさぶ8月13日に戦端が開かれた。この戦争は薩摩では「まえんはまんいっさ」(前の浜の戦い)と呼ばれている。

驚くべきことは、あの時代に薩摩が機雷作戦を実行したことである。砲撃戦に勝る英国艦隊に対し桜島と沖の小島間に3基の機雷を布設して待ち構えていたが、沖の小島の砲台が発砲したため英国艦隊は航路を変更したので、この作戦は空振りに終わってしまった。この機雷は斉彬が尚古集成館で製造させたものであった。それは、地上より電氣を用いて遠隔操作で爆発することになっていた。

機雷は250kgの火薬を内蔵していたので、触雷すれば2400トンの木造の英国国旗艦は一発で轟沈させた可能性がある。さすれば、違った歴史を辿ったかもしれない。

薩摩軍は貧弱な装備ながらよく戦った。武器の差は著しく、薩摩の大砲の大部分は丸い鉄の球を最大15cm飛ばすだけのものであったが、英軍のそれは火薬が詰まった椎の実型砲弾で、飛距離は1kmもある優れたものであった。大砲の数は、薩摩88門、英国艦隊108門であった。砲台は鹿児島側が祇園之州、新波止、弁天波止、南波止、大門口、天保山、桜島側が袴腰、鳥島、沖の小島、赤水の10カ所に設置されていた。

薩摩の戦死者は59名、戦傷者は18名であり、一方英国軍のそれは夫々15名50名で、戦死者には、旗艦の艦長、副長が含まれていた。薩摩は蒸気船6隻、民間船5隻と上町を中心とする市街の1割(民家550、藩士屋敷100軒)、さらに尚古集成館工場群を焼失した。集成館は、当時約1200人が働いていた日本の最先端最大の近代工場群で、反射炉、溶鉱炉、硝子製造所、火薬製造所、造船所を運営していた。このほか、ライフル銃、大砲、機雷、工作機(大砲の孔をくりぬく機械)、陶磁器、綿、氷白砂糖、硫酸・硝酸・塩酸、樟脳、はぜ、農機具、刀剣、和欧活字製造なども行っていた。さらに電信機や写真術も研究していた。

上町の被害が大きかったのは、砲弾、ロケット弾が住民の住まいのほか数千袋の硫黄を貯蔵している倉庫に命中したこと、暴風雨で木造家屋が次々に延焼したこと、藩の退避命令により消火する人がいなかったことなどによる。一方、この退避命令のため住民の死傷者は

極めて少なくてすんだ。

実質の戦闘は1日半で、8月17日英国艦隊は引き上げた。

この戦いに対し英国議会と国際世論は、戦争前に多額の賠償金を得ていたにも拘わらず鹿児島民家を砲撃したことはやりすぎとしてクーバー提督を非難した。

朝廷は薩摩藩の勝利を称え褒賞を下したが、薩摩は攘夷が実行不可能であることを認めた。薩摩は、この戦争で世界との実力の差をはっきり認識したので、和議を行い、賠償金を払い、生麦事件の犯人の逮捕と処刑を約束した。重野厚之丞、大久保利通等が和平交渉で英国と賠償金の負担問題で幕府と交渉した。慰謝料について、謝罪の意味合いの少ない家族養育料という名目で支払うことにした。しかも、慰謝料を幕府に払わせようとして、老中板倉勝静と交渉した。老中が金は貸せないと断ったところ、「それならやむを得ない。英国公使を斬り、切腹する」と脅した。幕府はこの気迫に負けて7万両を貸すことになった。しかし薩摩は、幕府から借りて支払った賠償金を幕府に払い戻すことなく踏み倒した。犯人は「逃亡中」とされたまま逮捕されず、奈良原喜左衛門は泉知事、海江田信義は枢密顧問官となり生涯を終えた。なお英国との交渉では、賠償金の支払いの条件として、大胆にも軍艦購入の斡旋を要請し、英国はそれに応じた。

この戦いで極めて大きな教訓を得た薩摩は、その後最新の機械、武器、艦船を輸入して、優秀な若者を秘密裏に留学に送り出すなど英国に急接近を図った。英国側も薩摩に対する認識を新たにし、外交の軸足を幕府から薩摩に移し変え始めた。

英国は高輪にあった仮公使館で1851年に発生した英人殺傷事件(東禅寺事件)の直後から、日本人による外国人襲撃事件が続けば、関門海峡、大阪湾、江戸湾などを軍事封鎖して、日本商船の廻航航路を封鎖する計画を検討していた。また陸軍と協議して京都、大阪、江戸を占領する計画も検討したが、ギリラ戦に持ち込まれたら不利になるとしてこの案は最終的に断念している。英国本土では、1853年に対日海上封鎖を含めた武力制裁に関する勅令が可決されていたのである。

この薩英戦争がなければ、外国勢は恫喝すれば日本は折れるとの認識をいよいよ強く確信して植民地化に乗り出したかもしれない。

この戦争における薩摩の堂々たる態度と義和団事件(中国で起こった帝国主義反対運動)で見せた柴五郎中佐の見事な指揮振りとは日本軍の規律が、その後英国が日本を日英同盟の締結に値する相手と判断したことは確実であろう。日英同盟がなければ、日本が日露戦争

で敗戦したことは間違いない。薩摩が薩英戦争で見せた日本人の気概がなければ、日本は他の植民地にされた国々のような悲惨な歴史を辿ったことであろう。

近隣諸国の恫喝に右往左往する政府指導者よ、この薩摩の骨太の心意気と堂々とした対応を見習ってほしい。

## 10 薩摩人の心意気

薩摩では、おおらかさ、爽やかさが徳目の一つであった。強敵には尊敬を払い、降参した敵、捕虜や弱者に対する寛大な扱いもそのひとつである。

五稜郭の戦いで、黒田清隆が榎本武揚の助命に奔走した時のことを述べる。黒田が榎本に降伏を薦めたが、徹底抗戦と拒否。榎本は、これからの日本になくはならぬものこの思いで、かつ、戦火による消失を恐れて、己がオランダで学び宝物としていた貴重な国際法の書物を黒田に贈呈した。その後も降伏勧告を続けたが拒否。黒田は幕軍の戦いを賞賛し、マゴロの匹と酒5樽を贈った。さらに、必要あれば食糧、薬、弾薬も届けると伝えると同時に、包囲網の一部に逃げ道をつくらせた。幕軍兵士はそれまで敗者、投降兵に対する官軍の恐ろしい処罰のことを聞かされ、投降に踏み切れずにいた。彼等は、函館病院での負傷者に対する薩摩軍の寛大な処置を耳にし、さらに今回の酒樽の差し入れを知り、一挙に戦意を喪失して逃亡兵続出となり、五稜郭は陥落した。榎本は切腹しようとしたが部下に取り押さえられ失敗した。

黒田は榎本の能力を高く評価し、彼を新生日本に是非必要な人材と思い、助命運動に乗り出した。それはいかにも薩摩に相応しい逸話として伝えられている。薩摩の教えでは、「互いの仕切りの中で死力を尽くして戦うのはいくさ人の定め。勝敗は時の運。降伏すれば敵も見方もなし」である。殆ど全ての新政府首脳は榎本を死刑にすべきとの意見であった。黒田は長州の木戸には、「榎本を死罪にすれば、国家の大損失。彼を死刑にするなら坊主になる」と言い、本当に頭を丸めてしまった。黒田の坊主頭の写真はこの時のものである。岩倉具視には、「死刑にすれば、薩摩と長州は敵対状態になる」、三条実美には、「天皇の人徳に感じ入って降伏したのに処刑したら、新政府は皇室をないがしろにしていると公表するようなものだ」とそれぞれに説得して回った。榎本は幕臣の意地と誇りをもって黒田の尽力に応え、ロシア大使、海軍卿の重責を担い立派に務めを果たした。

会津と共に幕府体制に最も忠実な庄内藩は、江戸市中取締りの役目を担当した。浪士

500名を集め江戸内外の擾乱工作を取り仕切っていた江戸の薩摩屋敷を攻撃し、焼

き討ちして50人近くの薩摩藩士を殺した。戊辰戦争でも官軍と勇敢に戦い敗戦した。会津と並ぶ徹底抗戦派であった同藩では、鶴岡城の落城に際して、藩士酒井忠篤の斬首を含む極めて厳しい処罰を覚悟した。藩主も藩士も白装束に身を固め、降伏式会場のふすまの後方には50人の槍の名人が待機し、降伏条件如何によっては打って出て全員切り死の覚悟で式に臨んだ。会場で西郷の意向を汲んで黒田が官軍代表として藩主に接した時、帯刀を許し、上座に据え、礼を尽くした。一般藩士にも帯刀を許し、外出も自由にさせた。同藩の人々は、「庄内藩は幕府のために徹底的に戦い、立派であった。藩主の斬首はもつてのほか」という西郷の寛大な処置を知り、感動した。さらに提出された武器目録をみて、「北国の雄藩である貴藩はロシアの侵略に備えて全部の武器を保管されたし」と返事し、藩主以下家臣全員感涙にむせた。このことを知った庄内藩士は、後日藩主以下20人が西郷の教えを乞いに薩摩にやってきた。かの名高い書物、「西郷南州遺訓」は、家老菅実秀が若者を連れて何度も鹿児島にやってきて受けた西郷の教えを纏めたのである。私学校が設立されると子弟を学ばせた。西南戦争では、十代の庄内藩士が薩摩軍に参加し戦死している。戊辰戦争後140年以上経過した今日でも、鶴岡の人々の西郷に対する気持ちは変わらず、同市と鹿児島市は兄弟都市の関係が続いている。

## 11 薩摩と中央政府

薩摩は、過去の回敢然と中央政府に刃向かっている。

1回目、8世紀初期の単人族の反乱、2回目は九州全土の平定を目指す薩摩とそれに対抗する秀吉との戦い、3回目は、徳川家康を相手にした関が原の戦いである。4回目は、徳川幕府を倒して新政府を樹立したこと、5回目は、西南戦争である。日本の歴史において、一地方勢力がこれほど大規模に抵抗した事はない。第2、3、4回目の戦では、現実を直視した見事な外交能力を持って対処している。これらのうち、1、2回目の戦いについて述べる。

はじめは、西暦1200年に起こった単人族の反乱である。単人族が政府の出先機関である大宰府の支配に従わないので、大和朝廷が直接鎮圧に乗り出してきた。単人軍は地元で大和朝廷派遣軍と戦ったが、1400余の首を掻き取られて敗戦した。この時の朝廷軍総司令官は歌人である大伴旅人であった。その後、単人族は朝廷の番人となった。なお、旅人は「海行かば」の和歌で有名な大伴家持の父親である。

2回目の秀吉との戦いでは、薩摩軍は20万の敵軍によって川内まで攻め込まれたが、余力を残して和を乞い、領土は元々の薩摩、大隈、日向の三州に安堵した。終戦処理のため薩摩に残留した石田三成に、藩財政運営の仕組みを教えられた。それは、全国から商品が一旦大阪に集まり、市が立ち、全国に出荷されていくという信長・秀吉が築いた商品経済体制を利用することと帳簿の管理技術であった。それ迄自給経済でやってきた薩摩にとっては初めての知識であり、以後それを積極的に活用した。それ以前販路がなく放置されていた琉球貿易も目の目を見ることになった。

上述したように、薩摩は中央政権に対し大規模な戦争を5回挑んできた。その結果他藩のことをよく知り、冷静な現実的判断力、優れた外交手腕と積極果敢な行動力で800年に亘り独立した空間を維持してきた。このような例は薩摩を除いて他に類を見ない。

なお、詳細は記憶にないが、島津家の当主忠重氏が対談で、「薩摩が昭和10年代の政権を担っていたら、日本は太平洋戦争を起こさなかったであろう」と発言していた。その可能性は大であったと言える。現代の政治家達よ、かつての薩摩が保持していた誇り、情報収集への努力、冷静な判断力、知恵、勇氣、行動力、見事な外交能力を見習い、堂々たる態度で国政を担ってほしい。

## 12 パリ万博

ロッシュ公使の呼びかけで、徳川幕府最後の年1867年に開催されたパリ万博に幕府、薩摩、肥前と江戸商人が参加した。薩摩が万博に参加した目的は、斉彬時代から計画があった海外への進出、幕府が日本唯一の政権でないことを国際的にアピールすること、薩摩藩の売り込みなどであった。万博に際しては、英国に密航していた薩摩藩留学生が大活躍し、薩摩藩の成功に貢献した。

薩摩は幕府の下で参加するものと幕府は理解していたが、いざ開催されるとびっくり仰天。薩摩は、「日本国薩摩大守政府」の名で独立してパビリオンを設け薩摩焼、漆器、扇などの薩摩・琉球の産物を100種以上出品した。小松帯刀総指揮の下、五大友厚が一年前から周到なる準備を重ねていたのである。帯刀本人が参加しなかったのであるが、城代家老という立場上、長期の出張ができません、家老若下方平を代表として派遣した。

薩摩・琉球国という勲章も用意してナポレオン三世を始めとする高官に贈与したので好評を得て、薩摩政府は各国に大君政府と同格の独立国家との印象を与えた。徳川慶喜の

弟昭武率いる幕府代表团と鉢合わせた際に、彼等から猛烈な抗議を受けた。だが、幕

府は

一枚上手を行く薩摩外交にしてやられたりで、切齒扼腕したが後の祭りであった。現場では、幕府の渋沢栄一と薩摩の五大友厚が火花を散らしたが、二人は後日東京商工会議所と大阪商工会議所の会頭になった人達である。

薩摩外交の成果として、薩摩の存在を認識させることのほかに、幕府フランス間で進められていたの100万ドルの借款契約を破棄に追い込んだことである。これが成立し、フランス陸軍の指導の下に幕府軍の装備近代化が実行されると、倒幕勢力は軍事的に幕府に対抗できなくなるため、どうしてもこの契約を潰さねばならなかったのである。

なお、江戸商人が設けた茶屋で6人の芸者が茶の接待等に努めたので、人气的になった。「カルメン」の作者メリメも茶屋の芸者を見て多に満足したと記している。

## 13 ペリー以前にやってきたフランスの黒船

ペリーの黒船来日の6年前、フランスの軍艦が1841年に通商を求めて琉球に来航し、強引に宣教師を残して退去した。難民の漂流や薪水の供給を求めたのではなく通商を要求してやってきたので、琉球政府、薩摩藩は驚いたが、幕府は外圧として深刻に受け止めた。これは「薩摩の黒船」と呼ばれている。翌年も英船が来て琉球政府の意向を無視して宣教師を残留させた。また、仏艦も再度やってきて通商を強く求めた。それは市場争いの一環で、いち早く中国に足場を築いた英国への対抗意識のなせる業であった。宣教師は布教のほかに市場獲得の先兵としての役割を担っていたのである。斉彬は老中阿部正弘と相談し、最悪の場合は琉球限りの通商はやむを得ないと内諾を得た上で、警備兵を琉球に派遣した。1850年琉球政府とフランス間で「琉球仏修好条約」が締結された。ただし、この条約で認められたのは、薪水食糧の供給とフランス人の自由行動のみで、通商と布教は対象外であった。

幕府は外圧に屈して、1854年神奈川条約で下田、函館、長崎を開港した。米国は下田ではなく薩摩の山川港の開港を求めてきていたのであるが、斉彬は、軍備を充実することなく外国の圧力に屈して開港しようとする幕府に対し焦りを感じると共に、幕府に海外貿易を独占されることを恐れていた。それで国防力強化と交易、販路の拡大を求めて思い切った手段を講じた。幕府、中国、諸外国に極秘裏に、1857年フランスとの間で琉球王国の

名で軍艦の購入交渉を開始させた。交渉はかなりの段階まで進んでいたが、斉彬の急死と共に久光はこの案件を破棄したので、この件は幕府に発覚することはなかった。それにしても、斉彬の先見性と大胆さには驚くばかりである。

明治維新に重大な影響を及ぼした海外貿易について補足する。足利義満のように時の政府はそれで莫大な収益を上げていた。信長、秀吉、家康然り。それで彼等はそれを政府の独占事業とした。しかし、薩摩、肥前、長州等は密貿易でかなりの額の藩収入を得ていた。それで、明治維新の原因を、海外貿易を巡る幕府と西国諸藩の争いとみなす経済史の専門家は少なくない。

#### 14 明治維新と薩摩

明治維新に際して、他藩では脱藩した「志士」個人の活躍が顕著である。しかし、薩摩においては、藩主以下「藩士」が一丸となって、力を分散させることなく、組織の力で維新を成し遂げたことを特徴とする。斉彬公、小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通等は明治維新の大なる功労者である。その中で小松帯刀の果たした役割は西郷隆盛、大久保利通、坂本竜馬等に優るとも劣らない。現在の西欧史観では、維新以前の日本人で世界に通用する偉人・英雄は織田信長のみであろうと思われる。しかし、明治維新を機会に、薩摩は大久保利通という世界基準の人物を誕生させた。新政府成立後活躍した山本権兵衛、東郷平八郎も、維新たけなわの頃はまだ若年で弾運び、あるいは兵士としての従軍程度の活躍しかしていないが、世界に通用する男達である。小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通等の爽やかで無私の身のこなし方は薩摩武士道の鏡であり、薩摩の誇りである。

#### 15 調所広郷と浜崎太平次の活躍

調所と彼を支えた浜崎等の藩財政立て直しがなければ、日本の国造りにおける斉彬公、西郷、大久保、小松、等の活躍はなかったといっても過言ではない。

薩摩藩の年収は約14万両であったが、明治維新の40年前の文政10年（1827）の借金は500万両に及んだ。利子は年12%なので利子だけでも年60万両に達するようになる。1827年調所広郷が中心になり、藩財政改革に乗り出した。無利子2500年年賦払い、藩内商人の貸金は放棄、砂糖など特産品の専売強化、密貿易の推進、花倉での質金づくし、等で財政再建を果たした。1844年には50万両、琉球貿易の責任を問われて調

所が自決した1848年には100万両を備蓄することができた。（1両=4.5万円）<sup>8</sup>

この財政再建に当り、浜崎太平次が調所を助け大活躍した。彼は斉興、彬育、忠義の三代の殿様に仕えた。幕府の手が彼に迫った時は斉彬自ら彼を護り、また彼（浜崎）が亡くなった時、久光に「右腕を失った」と言わしめたほど信頼が厚く、薩摩に貢献した。彼は、密貿易を含む貿易、海運、造船を主な生業としていたが、膨大な利益を藩に献納し続けたのである。米国の南北戦争のあおりを受けて国際的に綿花不足に陥った時、綿花交易に手を拡げて大儲けした。さらに南北戦争終結後余剰になった銃器を輸入し、薩摩や長州の新しい兵器の調達に貢献し、余った旧式の武器は幕府や諸藩に売りつけて膨大な収益をあげ、薩摩藩が明治維新で活躍できる資金の蓄積に貢献した。浜崎は紀州の「紀伊国屋文左衛門」、加賀の「銭屋五兵衛」と共に、「実業界の三傑」と言われている。

なお、川崎正蔵という薩摩人が、浜崎の長崎支店で10年間働いていた。彼は大阪に商店を開き浜崎の海運業を引き継いだ。台湾出兵、西南戦争における軍事輸送で若崎弥太郎との競争に敗れたので海運業から足を洗い、造船業に乗り出した。後日彼は日本の造船業界のパイオニアと呼ばれるようになった。彼の設立した会社が川崎造船で、現在の川崎重工業である。彼は後継者として薩摩出身の総理大臣松方正義の三男幸次郎を社長に選んだ。幸次郎は私財を注いでモネ・ルノワール・ロダンなどの美術品を蒐集した。これが有名な「松方コレクション」で、それを母体にして東京上野に設立されたのが「国立西洋美術館」である。

#### 16 薩摩人の評価

薩摩人を外国から見た場合どのように評価されるであろうか。最も人気があるのは誰であろうか。国際的に通用する人物は誰であろうか。独断と偏見をもって薩摩人を評価してみよう。

現在の世界史は西欧史観が主流である。それは力と一神教を基礎としており、徳を最大の徳目とする日本人の価値観とは相容れないものが多々ある。日本では聖徳太子や上杉鷹山は評価が高いが世界（西欧）基準ではそれほどの評価は得られないであろう。特に殿様が自ら率先して「肥えたこ」を担いで国づくりに励んだ名主君上杉鷹山も軽蔑の対象にしかないであろう。世界基準で見ると、明治以前の日本人の中で世界に通用する構想力と行動力を持った男は織田信長くらいであったろうが、明治以降薩摩から世界に通用する男達が生まれていえる。



実績から見ても薩摩で高い評価を得ている人物は、西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬、小松帯刀、島津義弘、東郷平八郎、山本権兵衛などであろう。評価される英雄・偉人を日本と世界に分けて述べる。

日本：西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬、小松帯刀

西欧を中心とする世界：大久保利通、山本権兵衛、東郷平八郎

日本における英雄は何と言っても西郷隆盛であろう。伝統的日本人の心情、徳を極めた人、「敬天愛人」そのもの人である。大久保利通は、西郷と車の両輪として働き、実績からいって西郷と同格あるいはそれ以上の実績がある。特に近代日本の諸制度の基礎はかれに由来と言っても過言でない。島津斉彬は幕末混乱期、日本や薩摩の実力と現実を正確に見極め、先見性をもって日本や薩摩を正しく牽引した名君であった。斉彬公はのちで死去し実権を握り活躍できた期間は僅か1年と短い。西郷隆盛や小松帯刀を見出し、活躍の場を与えた。小松帯刀は若くして亡くなったが、死ななければ初代の日本の首相になれた人物である。嫌がる久光をくどき落とす、西郷、大久保や精忠組の面々に活躍の場を与え、斉彬公亡き後城代家老として産業育成に力を入れると共に、朝廷、幕府、諸藩との交渉や調停役を務め薩摩藩をつまくり導いた。坂本竜馬と海援隊、さらに長州藩を援助し、さらに薩長同盟、薩土同盟を結び、徳川慶喜に大政奉還を薦めた。明治6年に惜しくも60歳で死亡したが、鹿大の原口泉教授は小松帯刀のことを「坂本竜馬を超えた男」と言っている。小松帯刀がいなければ見事な薩摩藩の活躍は云うまでもなく、西郷隆盛、大久保利通、坂本竜馬等の活躍もなく、まさに彼等を超えた存在と言えよう。

力の政治、軍事力、合理性と鉄の意志を持った冷静な判断力、行動力を重視する西洋や世界では、近代日本の基礎を構築した最大の功労者として大久保利通を最高に評価するであろう。さらに、世界三大海軍男といわれ、無い無い尽くしの状態から日本海軍を短期間に創設し、常識的には考えられない日本海海戦や日露戦争での勝利に大きく貢献した山本権兵衛も世界に通用する稀有な存在であろう。さらに、軍人の評価が高い西洋では、東郷平八郎もヒーローとして高く評価されるであろう。なお、島津義弘は世界的な広い活躍の場を与えられていたら、世界史に名を残していたかも知れない。

## 17 なに薩摩が西南戦争後急速に衰えたか

西南戦争後なぜ薩摩は衰えたのか、を考えてみよう。しばしば西南戦争で西郷さんと共

に後を引き継げる村田新八のような一流の人間が死んで人材が払底した、あるいは、郷中教育がなくなったからという人もいる。これらはある程度的確を突いているが、時代の流れを考えると、それだけとは言えない。

薩摩は、シラス土壌のため農業生産性は低く、米の生産には不適で、公表17万石は粗高で、実収入即ち玄米高ではその半分の約8万石しかなく貧乏であった。そのため参勤交代、出兵の際には石高の格式に従い、実質2倍を負わなければならなかった。

武士の比率は、全国的には人口の9.0%であるが、薩摩では奄美・琉球の人口を含めた場合約26%、本土だけの場合約88%と全国平均の9.1倍にも達し、武士の多さが財政難の原因となった。粉高17万石のうち、約6割は土族の給与で消えたのである。もっとも、土族の多さは、財政難に直結したが、いざと言つ時は貴重な兵力となり、さらに民衆支配特に一揆の防止にも繋がった。そのためか薩摩藩では組織だった農民の抵抗は記録に残っていない。

江戸末期になると、新田開発、農業技術の進歩、商品経済の発達などにより、経済的には農・工・商が豊かになった。それと対照的に顕著に地盤沈下したのは土族階級であり、彼等の多くは内職をせざるを得ない状況になった。また、新政府首脳が生命を賭して版籍奉還を提案した時、藩主側があっさり受諾したのは如何に彼等の台所事情が苦しかったかの証左である。他藩では江戸末期になると、渋沢栄一（豪農）、石田梅岩（商人）、中岡慎太郎（庄屋）、広瀬淡窓（富商）の例に見るように、農業を基礎として豊かな農家、庄屋、商家の層が育ちはじめた。この層は志士を生み、その蓄えは商業資本等の元となり、地場産業の発展に繋がった。薩摩にはこの富裕層の存在しなかったことがその後の発展の妨げとなった。また、薩摩藩はシラスで覆われているため、工業用水の確保及び工場の誘致ができず、近代化に遅れを取ってしまった。

時代が記憶と事務能力に優れた学校優等生的な人に有利な社会環境に大きく変わったことも薩摩人にとって不利となった。他藩に比べ、心の鍛錬に重点を置き、「尻理屈を言うな。言い訳をするな。泣くよっかひっ飛とべ」等の伝統的薩摩の教育・文化・思考は、学校優等生的、テイバートの巧みさも要求される世界では普遍性に欠けた。明治維新で社会が変革した時、薩摩の人々は新しい時代の波について行けず、新時代では不利な立場となった。

## 18 田の丸と島津斉彬

日本人は古来太陽を信仰してきた。日の丸は太陽をデザインしたものである。世界的に太陽を赤で表す例は珍しく、普通黄色又は金色で、月は白色ないし銀色で表されてきた。日本もその例にもれず平安時代末期までは日輪は、赤地に金色で表示されてきた。その後、日本人好みで目出度い色である紅白で、すなわち、日の丸は白地に赤丸で表されるようになった。日本では、日の丸は各所で広く用いられてきた。例えば、謙信、信玄、信長は旗指物として、朱印船や琉球船の旗として採用されてきた。

1854年日米和親条約締結後、国際的に外国船と区別するために日本の船印が必要になった。幕臣は下図に示す白地に中黒印の旗を日本の国旗として、日の丸を徳川幕府の旗とする意見が強かった。水戸の徳川斉昭は、日の丸を日本の国旗とすべきとの建白書を幕府に提出した。斉彬は、水戸、越前、尾張、宇和島、肥前の藩主達と密接に協議し、日の丸への賛同を得ると共に老中阿部正弘に日の丸を国旗に制定すべきと進言した。1854年阿部正弘が日の丸を日本総船の印と決定を下した。一般には斉彬公の進言で決まったように言われている。しかし、斉彬が大きな役割を果たしたことは間違いないが、斉昭、老中の尽力によることも無視できない。この3人の尽力がなければ、日本の国旗は日の丸ではなくて中黒印になってしまった可能性がある。なお、中黒印の旗は、白地に黒の横一文字の源氏の旗で、それを新田義貞が横中黒にデザインし使用したものである。

安政2年(1854)薩摩藩が幕府に献納するため、日本最初の西洋式軍艦である「昇平丸」は日の丸を揚げて錦江湾を後にした。これが公式に日本で最初に船に掲揚された日の丸であると考えられている。



大中黒旗

日の丸

明治時代に、英国、フランス、オランダが日の丸の意匠を買い取ろうと日本に話を持ちかけたと言いつ話が残っている。明治7年(1874)英国が当時の金500万円で意匠の買収をはかり、外務卿寺島宗則が交渉に当たったと言いつ話が真しやかに伝えられている。しかし、いずれも真偽の程は不明である。

色違いを考慮しないと、青地に黄丸のパラオの国旗、緑地の赤丸のバングラデシュの国旗は日の丸と同じデザインである。これらの国で、日の丸型デザインを採用するに当たって日本のイメージが強く影響したといわれている。

国家「君が代」の原型は、「古今和歌集」(905年)の「賀歌」として、「わが君は千代に 八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで」であった。「私の尊敬しているあなた様は、小石が大きな巖となり、さらにその巖に苔が生えてくるように、千年も万年も長生きして下さい」という長寿を謡った目出度い歌で、全国的に祝賀の席で歌われ続けてきた。「和漢朗詠集」(1013年)では「わが君・」が「君が代・」に改まっていた。この歌詞を国歌に選んだのは、大山巖元帥であったと言われている。作曲ははじめ横浜駐屯の英国軍楽隊長が行ったが不評に終わった。現在のものは10年後の明治13年に日本人により作曲し直されたものである。

## 16 麦飯男爵・高木兼寛

一般には余り知られていない薩摩の誇るべき高木兼寛を紹介しよう。高木兼寛は1846年薩摩藩の支藩である佐土原藩現在宮崎県で生まれ、海軍軍医総監となり、日本の医学発展に大きく貢献し、男爵を授与された。彼は脚気防止のため積極的に麦飯の摂食を推進したので「麦飯男爵」という紳名が付けられた。英国で医学を学び帰国後、脚気の予防法を確立し、東京慈恵会医科大学と日本初の看護学校を設立した。当時日本ではドイツ医学を採用したので病理面を重視し患者を研究対象とした医学が主流を成していたが、高木は「病を診ずして病人を診よ」と、患者よりの臨床医学を重視した。脚気は第1の代家定将軍、14代家茂将軍が死亡したように国民病の様相を為していた。白米を主食とし、蛋白質を取らない食事のため、陸海軍では脚気患者の多さに悩まされていた。海軍では60%の将兵が患者であった。遠洋航海に出ると半数近くが脚気となり、死亡者も多数出て、戦闘能力が著しく低下した。当時下級兵士達は、貧農の出が多く、支給された副食費を切り詰め親に送金し、1日当たりの合の白米とタウファンという偏った食事を取っていた。そのためビタミン不足で脚気

になっていたのである。日露戦争を控え、陸海軍とも脚気は大問題となっていた。高木は、海軍で麦飯と蛋白質を取る食事に切り替えさせ、脚気を退治した。陸軍ではドイツ医学の信奉者である森林太郎(鷗外)をはじめとする軍医達は、細菌が原因であるとして海軍の食療法を無視し、日露戦争でも脚気による多数の死者を出した。日露戦争では20万の兵士が動員されたが、脚気死亡者は4064人で、戦死者の4.2倍に及んだ。日露戦争の場合109万の兵士が動員されたが、脚気死亡者は28万人で、戦死者の1.2%に達した。元々海軍は陸軍より兵員数が1桁少ないが、海軍では日清、日露戦争の脚気死亡者はそれぞれ僅か0および3名であった。度重なる海軍の忠告を無視し、多数の脚気死者を出した森林太郎をはじめとする陸軍軍医達の責任は極めて重いが、責任追及はなされずやむを得るうちに終わってしまった。

その後、脚気はビタミン不足による栄養障害であることが判明し、高木はビタミン発見の先駆者、あるいは栄養学者として特に外国で有名になった。1959年、英国の南極地名委員会が南極半島の地名に数名の世界的栄養学者、ビタミン学者の名をつけることになった時、その一箇所に「高木岬」(Takagi Promontory)という名が付けられた。脚気防止とビタミン発見の先駆者としての功績を称えられたのである。因みに国外で日本人の名前がついているのは、間宮海峡と高木岬だけである。

## 20 議を言いな

薩摩には「議をいっいな」という便利な言葉がある。「屁理屈を言うな、異義を申し立てるな」的にとらえられる場合が多いが、本来の意味は以下の通りである。郷中教育では、にせ(二才)たちが集まり、武士としての心構えの涵養を目的として軍記などからテーマを選び穿議(詮議)を行った。結論が出るまでは、年齢や資格の関係なく参加者全員徹底的に納得いくまで議論に議論を重ねてよい、いや議論すべし、というのが基本的姿勢であった。「議をいっいな」の真意は、一旦結論が出たらそれに「議」を言ってはならないという意味である。結論が出るまでは、薩摩にも西欧のいう「ライバート」が積極的に推奨されていたのである。

## 21 郷いばなをいっいな

薩摩人の代表的性質である「いっいな」を西郷兄弟の例で見てもよい。明治の御代に代った時、国民全員姓名を登録しなければならなくなった。その時西郷さん

は東京に不在であった。子供の時から西郷さんの同志で親友である吉井幸輔(友美) 11  
が代

理で役所に届けた。西郷さんが戻ってきて、吉井に礼を述べ、「おいの本名は、隆永(たかなが)じゃった。隆盛でもよか。実は隆盛は父親の名前であったのだ。

弟の西郷従道の場合、係りの役人がきて名を聞いた。「オイの名は音読みでリュウドウじゃ」と答え、無事登録は終了した。薩摩ナマリのため役人の耳には「シュウドウ」と聞こえたのである。後日それがわかり、「なるほど、オイは、従道か」と大笑いした由。本当の名は隆道であったのである。

ロシアの皇太子が日本を訪問した時、大津で巡査が皇太子を刀で切りつけた。これを口実にロシアは日本占領に乗り出すのではないかと国民、政府首脳は共に真ッ書になった。その頃は、江戸末期からロシアの南下政策、日本を植民地にするのではないかとロシアの野望を最大の恐怖と捕らえていた弱肉強食が真ッ盛りの時代である。従道がお詫びのため日本政府を代表してロシアに出かけ、エカテリナ女帝に接見した。お詫びが終わったあと、女帝曰く、「リュウドウ、日本の軍人さんの趣味は何ですか」。通訳は困ってもじもじしていたところ、女帝から正直に通訳しなさいと言われ、従道の言葉を伝えた。華やかで上品な宮廷外交のやり取りしか知らない女帝はそれを聞いて、びっくり仰天して笑い転げ、それまでの日本に対する悪感情を一発で吹き飛ばしたそうである。従道曰く、「オイの趣味は、酒とおなごじっわな」。

第一次大戦終了後、イタリアでのしセブシヨンの席上、主賓である従道が挨拶した際の話。従道おもむくに登壇、一瞬会場は静まりかえり、客の耳目は壇上の主賓に注がれた。オイは、西郷従道でこわす。よろしく、とだけ言って降壇。さて、困ったのは通訳である。彼はながながと喋りその場をうまく収めた。外国の外交団、いたく感心して曰く、「こんな長い話を何と短い日本語で表現できるのか。何と便利な優れた言語か」。実際には、通訳が目を白黒させながら適当に言い繕ったことが彼等には分からなかったのである。

## 22 ソーソース

醤油のことをなが「ソーソース」(Soy Source)と云うのが不思議に思う人がいるのではない。それは薩摩ナマリのことらしい。薩摩流の発音は、西郷がセロの如く言葉を縮めて発音する。醤油のことを「ソイ」と発音した薩摩弁のため、英語で醤油、大豆のこと

とをそれぞれ“ソイ・ソース”、“ソイ・ビーン”となった次第である。カコツマ弁ハンザイだ。なお、後述する浜崎太平次は奄美大島で醤油を醸造しフランスに輸出しているが、その時“ソイ”が国際的に広まったのかも知れない。

### 23 シラスの下に先人遺跡か？

鹿児島が東西に引く張られ南北に開いて、鹿児島湾ができたのが北京原人の出現より10万年ほど前の約70万年前である。その後、薩摩では何度も大規模な火砕流（シラス）の噴火が起こった。それ等は、北から南へ加久藤（60万年前活動）、始良（24万年前）、阿多（10万年前）、鬼界（6300年前）等の各カルデラの形成に伴った火砕流（シラス）の活動である。国分市上野原遺跡は、鬼界カルデラの火砕流アカホヤ層の襲撃で絶滅した我々の先祖の遺跡である。この遺跡は約6000年前のものと推定され、日本各地に分布する普通の縄文遺跡より一段と古い縄文遺跡である。

火砕流は時速数100-100km、温度最高900-1000℃に及び高温の火山灰・岩屑の高速度流動で、一瞬にして全てを焼き埋め尽くす恐ろしい自然現象である。シラスに覆われると、シラスは酸性なので遺跡は残っても、人骨は溶けて残らない。現在始良カルデラに伴う入戸火砕流が噴出すれば、数ヶ月と言つ短い期間に山形屋も、玉竜高校も、磯公園も埋没し、南九州全体が入り入り見当たらない月の砂漠になってしまうであろう。薩摩には旧石器・縄文時代にも波状的に幾度も南方民族がやって来たことは間違いない。となると、度重なる火砕流の下部には未発見のくく古い先祖の遺跡が眠っていても何ら不思議でない。

もう一つ別の可能性もある。現在の海水面から約130m下部には地形的に水平な大陸棚が広がっており、薩摩では大陸棚の幅は現在の海岸線から15-30kmである。これは17万年前の最終氷河期に形成されたもので、その後約8000年前から海面上昇が始まり現在の水位に至っている。このように海水位も気候に合わせて絶えず上下しているのである。海岸は魚、貝、海藻など食料が豊富で住みやすい。旧石器・縄文時代に薩摩に辿り着いた先祖の遺跡が当時の大陸棚に残っていても何ら不思議ではない。

以上を纏めると、カルデラ形成に伴い噴火した火砕流の下部や現在の海面下100mの大陸棚には、全く知られていない我々の遠い先祖の遺跡があるかも知れない。だれかその発見に挑戦してみよう。

### 24 玉竜への期待

玉竜が中学校一環教育となったことで結構なことである。教育ママには崖の上から突き落とされ、世間から白い目で見られそんな事を述べる。小物ほど偉そうなことを吼えるものだと、暴言をお許し願いたい。

授業は中学から高1までは、国語、数学、徳育（一般教養）、体育（騎馬合戦、棒倒しなど）とアソビ（自然観察、昆虫採取など）だけで充分だ。国語、数学の時間は最大で全授業時間の半分とする。その中でも、国語が全ての学びの基礎になるので国語教育を最も重視してほしい。残りは徳育、体育とアソビの時間にする。子供時代は自然の中で大いに遊び、それを通して徳育を涵養し、高い教養と常識を身につけ、精神と体を鍛えるべきだ。ただし一方的な体育系にならないようにバランスを取って、日本人の弱点であるタイプートの訓練も必須とする。

英国のパブリック・スクールや郷中教育の良い点を取り入れて、志が高く、爽やかで、気概のある自立した日本人、逞しく健全な肉体と精神を備え、自信ある国際人に育ててほしい。巷では、小学校から英語教育が必要とされているが、誤解もはなはだしい。国際人とは、日本文化を深く知りそれに誇りを持つと同時に、広い視野と世界に通用する常識と教養を身に付けて、自国の立場と自分の意見を堂々と主張できる人物のことである。国際舞台に出たら、中身が第一で、有名校であるか否かは大切ではない。米国や英国のエリート養成を見習うと良い。彼等の多くは子供時代専ら遊んだり、あるいは自分の好きなことに熱中しているが、時期がくると自ら判断して猛烈に勉強を始める。受験・学校優等生は世界の舞台では全く通用しない。受験勉強は高2で集中的にやると良い。

小生は、民間及びCOV等政府関係の資源調査で11年の海外生活を経験した。気になることは、エリート日本人の救い難いひ弱さである。学校優等生そのまま、指示待ちで自立できず、遺伝子から逞しさを抜き取られたような感じがする。外交官などはその最たるものである。大切な子供時代を受験勉強に費やし、身につけるべき大切なものを学んでない。プロトコル（外交儀礼）や外国語のベテランになっても中身が無いと国際社会では全く通用しない。東京にしか目の向かない外交官や民間エリート駐在員等と対照的なのが、海外青年協力隊員や名もなき民間のボランティア達である。彼等は独立自尊の精神を持ち、日に焼けた真っ黒な顔にこころ笑った時の表情がすばらしく、本当にキラキラ輝いている。小さく固まっていない。どんな環境におかれても、広い視野と慈愛の精神を持ち、他流試合ので

きんぎょがながあつた。まねて国のまねである。願わくは、玉音の若者達がそつと人間になって  
ほつちませうだ。

(2010.11.13)